

論文内容の要旨

申請者氏名 関谷 善行

論文題目 中学生の自尊感情についての意識変容の研究－園芸活動・昆虫飼育を通して－

発達段階として思春期である中学生にとって、いのちの大切さを認識させる教育は悲慘な青少年の事件が絶えない現在にとって必要不可欠である。さまざまな教育施策が試案される中、どのような方法が効果的であるのか、また、現在実施されているいくつかの実践が果たして本当に効果的なのかどうか。その方法と効果について心理学的に分析してみるのが本研究の目的である。具体的な仮説としては、「実際に幼稚園・小学校を中心によく行われている園芸活動としての植物栽培や昆虫飼育を、中学生を対象に実施することによっていのちの大切さを認識するうえでより良い効果がある。」というものである。実際に、どのような意識変容をもたらすのか、その効果を自尊感情を中心にして、心理的に分析してみた。

まず、中学生が、植物に対してどのような意識を持っているのかを基礎とした調査を実施した。中学校 1 年を対象に神戸市内の環境の異なる 3 校に調査依頼し、比較検討をした。その結果、男女差があること、学年差があること、地域差があることが示唆された。また、調査項目として、自尊感情尺度を中心とした分析が効果的であることを性教育デリバリー授業の事前事後調査から明らかにし、自尊感情を中心とした分析を実施した。

各年度、各学年を対象にして、ミニトマト栽培とモンシロチョウ飼育をさせて、事前事後の意識変容を自尊感情尺度を中心に比較分析を実施した。方法として、ミニトマト栽培については、5 月初旬から 36 人前後の 1 クラスで 6 班編成して、班ごとにプランターを割り当てて、植え付け作業から、水遣りなどの世話をさせて、学期終了直前の 7 月に収穫し、試食をさせた。次に、モンシロチョウ飼育については、ミニトマト栽培と同じく 1 クラス 6 班編成して、班にシール容器を配布し、シール容器にモンシロチョウの卵もしくは 1 令幼虫を 10 匹入れ、1 か月後に羽化するまで飼育させた。また、園芸活動としてミニトマト以外にもペチュニアを同様に栽培させた。この栽培と飼育の事前事後で、自尊感情尺度による意識調査を実施して前後の数値比較等分析を実施した。その結果、全体的な比較では、はっきりとした違いが見いだせなかったが、度数分布や得点群別比較、因子分析等をしてみると、男女差や学年差が顕著になってきた。中学 2 年生という発達段階で、特に得点で下位群が著

しく数値が増加したことから、この時期が、実施時期としては、最も効果的であることが示唆された。また、ペチュニアよりもミニトマト栽培の方がより効果的だといえることも示唆できた。これは、ミニトマトの方が、苗から成長し、開花、結実に至るまでの変化が顕著であることや、結実した果実を食べることによって、より一層、体験が深まることが要因と考えられる。ただ、成長するのを観察させるだけでなく、嗅覚や味覚まで刺激して、体験させることが重要であろう。さらに、モンシロチョウ飼育では、逆に数値が減少した学年があることから実施するにあたっては注意が必要であること、子どもの状態をよく観察し、効果的に実施するための計画をしっかりと立てなければならないことが示唆された。また、事後感想文によるテキストマイニング分析や、類型別分析によっても命に関する生徒の意識、つまり、道徳性が向上したと考えられるような結果となった。

以上から、今後中学校で園芸活動や昆虫飼育をする際は、生徒の個人的な嗜好や生育環境等を十分に考慮して、系統的、計画的、組織的に実施することを考えなければならない。園芸活動や昆虫飼育を効果的に実施することが、子どもたちの命に対する意識や道徳性をより良く変容させることができるということを主張し、そのカリキュラムを学校教育活動の中で開発していくことを提言したい。同時に、これらの取り組みがさらに全国的にも世界的にも広がっていき、少しでも子どもたちのストレスを軽減できればと思うのである。

発表論文

吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要第 11 号

園芸療法学会誌第 6 号

道徳性発達研究第 9 巻第 1 号

審査結果の要旨

中学生の心理社会的環境では、特に近年「いじめ」をはじめ、他者への暴力・傷害など、他者の人格の尊厳や「いのち」までもが軽んじられる行動が頻々と生起し、由々しい状態にあるといえる。時代や社会構造にもよるが、思春期の真只中にいる中学生の犯罪にも結びつきかねない現状をどのように改善していくべきなのか。それには「いのち」の大切さを実体験させる教育効果を例証することで、この時期の生徒の教育プログラムのあり方への提言に繋げていくことが可能となるのではないか。「いのち」の大切さを教育現場で認識させうる方法として、幼稚園や小学校で効果を上げている園芸活動や昆虫飼育を中学生に適用して効果を見出すことはできないか。本研究では、このような観点から、教育現場の中で中学生の実践的取り組みが計画され、実行された。仮説として、「中学生を対象に、植物栽培や昆虫飼育を実施することによっていのちの大切さを認識するうえでより良い効果がある」が設定された。

論文は、中学生を対象とした「いのち」を大切に人権教育、中学生の植物に対する意識の把握および園芸療法の適用の可能性、園芸活動（ミニトマト栽培やペチュニア栽培）による自尊感情や「いのちのアンケート」に見られる意識変容、昆虫（モンシロチョウ）飼育による自尊感情や「いのちのアンケート」に見られる意識変容、などから構成された。その中の本研究では、園芸活動（ミニトマト栽培やペチュニア栽培）の前後、あるいは昆虫飼育の前後を比較することによって、自尊感情や「いのちのアンケート」に見られる意識変容に効果が見出せるか否かが検討された。非常に意味ある結果としては、特に中学2年生において、自尊感情や「いのちのアンケート」項目の高得点群や中得点群に比較して低得点群の生徒では園芸活動の効果が顕著となったことが挙げられる。そのため、特に、自尊感情が低い者への園芸活動の効果が示唆された。

本研究は中学生を対象に園芸という教育的実践の中で自尊感情の低い生徒への効果が一部で見出されたが、これは、「いのち」の大切さの教育的改善が、極めて限定的な局面でしか生じていないことを意味する。とはいえ、幼稚園や小学生のような幼児期や学童期の発達段階の早期でのみ園芸活動や昆虫飼育の「いのち」の尊厳に関する効果があるのではなく、青年期前期でも園芸活動や飼育課題の与え方を工夫さえすれば効果が上がること、したがって、「中学生を対象に、植物栽培や昆虫飼育を実施することによっていのちの大切さを認識するうえでより良い効果がある」という仮説は、限られた条件内で検証されたといえよう。

本論文の諸研究では、研究と次に行われた研究の繋がりに論理的な積み上げが乏しい、いわば探索的な所見が大方を占めた。また、「いのち」の大切さと自尊感情とがどのような関係にあるのかの考察も十分とはいえない。「いのち」の大切さや道德教育に、園芸活動や生き物飼育が有効となる教育プログラムの提言への道程は、端緒についたばかりである。